

水無月祓

佐阿弥作

ワキ 夫

狂言 里人

シテ 妻（狂女）

地は 山城

季は 六月

ワキ詞

「是は下京辺に住居する者にて候。我さる子細あつて播磨の国に下り。久しく室の津に逗留の間。相馴れし女の候ふに都に上りなば。必ず迎妻となすべき由堅く契約申して候。されば此程室の津へ迎へを遣はし候ふ処に。彼女居候はぬ由申し候ふ間。今は尋ぬべきやうもなく候。又今日は名越の祓にて候ふ程に。賀茂の明神に参詣申し。彼逢瀬をも願はゞやと存じ候。

狂言

「是は此あたりに住居仕る者にて候。今日は水無月祓にて候ふ程に。糺へ参らばやと存じ候。

ワキ詞

「なふ是なる人は糺へ御参り候ふか。某も御供申し候ふべし。

狂言

「見申せば都の人にてありげに候ふが。不知案内なるやうに仰せ候ふよ。

ワキ

「仰せの如く都の者にて候へども。久しく田舎に候ひてまかり上り候ふ故かやうに申し候。

狂言「実にくさやうの事も候ふべし。さらば御供申し候はん。

ワキ「此頃都には如何やうなる珍らしき事か候。

狂言「御存じの如く都は広き事にて候ふ程に。いろく珍しき事も多く候。先づ此御手洗に参りて面白き事の候。

ワキ「如何やうなる事の候ふぞ。

狂言「若き女物狂の候ふが。巫のやうなる有様にて。水

無月祓の輪を持ち。人々に茅の輪の謂を申してくゝらせ候ふが。是非もなく面白う舞ひ遊び候。是を見せ申し候ふべし。

ワキ「さらば其物狂を見うずるにて候。

狂言「何かと物語申して参り候ふ程に。はや糺へ参りて候。御覧候へ殊の外群集にて候。彼物狂を待ちて見せ申し候ふべし。

シテ一声「行く水に数書くよりもはかなきは。思はぬ人を思

ひ夫の。跡を慕ひて上り瀬の。清き流れや中賀茂
の。御手洗川につどふ君。今日の名越の祓して。
此輪越えさせ給へとよ。恥かしや人は何とも白波
の。

地 「木綿しで掛くる御祓川。

シテ 「恋路をたゝす神ならば。

地 「などか逢瀬のなかるべき。

シテサシ 「実にや数ならぬ。身にも喩へは在原の。跡は昔に

業平の。此河波に恋せどと。掛けし御祓も大麻
の。引く手あまたの人心。頼むかひなきかねこと
かな。とは思へども我は又。浮寐に明かす水鳥の。

下歌 「賀茂の河原に御祓して。逢瀬をいざや祈らん。

上歌 「夏と秋。行きかふ空の通路は。く。かたへ涼し
き風ぞ吹く。御手洗川は濁れども。澄みてます賀
茂の宮。誓ひ糺の神ならば。頼みをかけて憂き人
に。めぐり逢ふべき小車の。賀茂の河原に着きに

けり。く。

狂言

「唯今申す女物狂はこれにて候。言葉をかけ輪の謂を申させて聞し召され候へ。」

ワキ詞

「承り候。さらば言葉をかけて謂を聞かばやと思ひ候。如何にこれなる狂女。見れば茅にて作りたる輪を持ちて。人々に越えよと承り候。名越の祓の謂こそ聞きたう候へ。」

シテ詞

「妾は狂人なれども。祓の謂を申して聞かせ参らせ候ふべし。」

ワキ

「さらば懇に語られ候へ。」

シテ詞

「忝くも天照太神皇孫を。蘆原の中津国の御主と定め給はんと有りしに。荒ぶる神は飛び満ちて。螢火の如くなりしを。事代主の神なごめ祓へ給ひしこそ。今日の名越の始めなれ。されば古き歌に。五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて。今日は名越の祓へなるらん。」

詞「さてさばへなすとは夏の蠅の飛びさわぐが如くに。

障りをなす神を云へり。かゝる畏き祓へとも。思

ひ給はで世の人の。

ワキ「祓へをもせず輪をも越えず。

シテ「越ゆればやがて輪廻を遁る。

ワキ「すはや五障の雲霧も。

シテ「今皆尽きぬ。

ワキ「時を得て。

地「水無月の。く。名越の祓へする人は。千年の命

延ぶところ聞け。輪は越えたり。御祓の此輪をば

越えたり。真如の月の輪の謂を。知らで人な笑ひ

そよ。もし悪しき友あらば。祓へのけて交へじ。

身に祓へのけて交へじ。輪越えさせ給へや。此輪

越えさせ給へや。名を得てこゝぞ賀茂の宮。名を

得てこゝぞ賀茂の宮に。参らせ給はゞ。御祓川の

波よりも。此輪をまづ越えて。身を清めおはしま

せ。千早ぶる。神のいがきも越えつべし。もと来し方の道を尋ねて。迷ふ事はなくとも。異方な通り給ひそ。今日は名越の。輪を越えて参り給へや。

シテ
「神山の。二葉の葵年旧りて。

地
「雲こそかゝれ木綿鬘の。神代今の世おしなべて。今日は名越の。祓へなごめ静めて。心ぞ清き御祓川の。波の白和幣。麻の葉の青和幣。何れも流し捨衣の。身を清め心すぐに。本性になりすまして。

いざや神に参らん。此賀茂の神に参らん。

ワキ詞
「如何に申し候。此烏帽子を召されて。面白う舞うて御見せあれと人々の御所望にて候。

シテ詞
「実にや臨時の祭には。かざしの花を賜はるとかや。妾も烏帽子を打ち着つゝ。神の御前に狂はまし。賀茂川の。後瀬しづかに後も逢はん。妹には我よ今ならずともと聞く時は。祈る願も頼もしや。

ワキ
「実に濁りなき此神の。御心なれや賀茂の河。

シテ「今此水に影をうつす。舞の袖こそいろく」の。

ワキ「心を種の手向草。

シテ「さるにても。よそには何と御祓川。

シテ「御祓川。水も緑の山陰の。

地「賀茂の宮居の御手洗川に。うつる面影く。

シテ「あさましや。もとより狂気の我身なれば。

地「見しにもあらず自から。うつる姿は恥かしや。は
ごねも眉も乱髪。賀茂の社へすごくと。歩み

よるべの水の綾。呉織くれぐと。倒れ伏してぞ
泣き居たる。

ロンギ地

「不思議やさては別れにし。其妻琴のひきかへて。
衰ふる身ぞ痛はしき。

シテ

「声は其。人と思へど我ながら。現なき身の心ゆゑ。
たゞ夢としも思ひかね。胸うち騒ぐばかりなり。

地

「実にや思へば影頼む。恵み普き室の戸に。

シテ

「立つ神垣も隔てなき。

地 「御名も替はらぬ。

シテ 「賀茂の宮居。

地 「実にまこと有難や。誓ひは同じ名にしおふ。室君
の操を知るも。たゞこれ糺の御神の。御恵みなり
と同じく。ふたゝび伏し拝みて。妹背うちつれ帰
りけり。く。